

# 主張度の強い場面における女性文末詞使用

— 実際の会話とドラマとの比較 —

水本光美・福盛寿賀子

(水本：国際環境工学部 情報メディア工学科)

(福盛：国際環境工学部・国際教育交流センター非常勤講師)

## キーワード

(女性文末詞・使用率・ドラマ・会話・主張度・ジェンダー・フィルター)

## 要旨

本研究は、現代テレビドラマにおける20代から30代の若い女性登場人物と現実社会の同世代の女性による「わ」や「かしら」のような女性文末詞の使用実態調査により、その特徴を比較分析するものである。ドラマの中で普段は女性文末詞を使用しない若い女性登場人物に焦点をあて調査した結果、彼らは反論、非難、抗議、自己主張などの主張度の強い場面において頻繁に女性文末詞を使用するという特徴を数値化により明らかにした。そのうえで、現実社会においても同様な傾向がみられるかどうかを検証するために、同世代の標準語を話す若い女性たちに、主張度の強い場面を設定したロールプレイを演じてもらい、その会話を詳細分析した。その結果、ドラマのように女性文末詞を使用する傾向は認められなかった。これより、現実社会では若い女性たちから女性文末詞はほぼ消滅しつつあるということが実証された。現実で使用されていない女性文末詞がドラマの主張度の強い場面に現れる理由として、脚本家に変化する言語使用を認識せず過去の女性の言語使用をモデルとしている可能性、あるいは、脚本家による何らかのジェンダー・フィルターが存在する可能性が推察される。

## 1. はじめに

「わ」や「かしら」などに代表される女性特有とされてきた文末詞（本稿では以後「女性文末詞」という）は、日本語の女性ことばの代表格とされてきた。しかし、90年代初期以来、諸研究によっても報告されてきたように、これらの女性文末詞は、若い世代の女性の親しい者との会話（以後「カジュアルな会話」という）からは徐々に姿を消し始め、現在では20代から30代の若い女性たちのカジュアルな会話からは、ほとんどが消滅しつつある。一方、テレビで放映されている現代ドラマでは、いまだに従来型の女性ことばが若い女性たちによって頻繁に使

用されることが多い。殊に、反論、非難、抗議、自己主張など主張度の強い場面では、普段女性文末詞を使用しない登場人物であっても女性文末詞使用に転じることが水本他（2006）で報告された。

本稿では、水本他（2006）で分類された主張度の強い対立的な場面に焦点を絞り、ドラマと実際の会話との女性文末詞の使用実態を調査し、比較分析するものである。

## 2. 先行研究と研究目的

### 2.1 先行研究

女性文末詞に関する最近の先行研究の代表的なものには、尾崎（1999）、中島（1999）、小川（1997,2004）がある。尾崎は「わ」の使用は調査当時（1993年）には衰退に向かい、「だわ」の使用は皆無に近く「死語」「旧女性専用形式」と報告し、中島は「かしら」「わね」「わよ」などの衰退を指摘している。また小川は現代の若い女性において「わ」や「体言よ」の使用が減少し、話し言葉における従来の男女差がなくなっているとしている。さらに水本（2005,2006）、水本他（2006）においては、上述の女性文末詞が20代、30代においてはほぼ消滅に近いことを報告したうえで、テレビドラマにおいては、いまだ高い頻度で使用されているとした。さらに、水本他（2006）においては、登場人物が相手を非難する、相手に反論するといった対立的な主張度の強い場面では、普段女性文末詞をほとんど使用しない女性が女性文末詞使用にスイッチする傾向があることに言及した。これより先に野田（2002）は、伝達の終助詞「わ」は、「強い感情や驚きを伴って認識したことを表す」としており、同様の報告は、小説の登場人物は抗議等の場面で女性ことばを使用することが多いとした山路（2006）にも見られる。

### 2.2 先行研究の課題

抗議等の場面での女性文末詞の使用傾向を報告した先行研究の課題を以下に述べる。

山路（2006）は音声言語を伴わない小説の中での発話を調査対象としたが、それはあくまで小説という書かれたものでのことであり、実際の会話で同様の使用状況が見られるかという点には触れていない。

水本他（2006）では、ドラマにおいて女性文末詞が現れる傾向のある場面を分類し、それらが主張度の強い場面であることを報告したが、数値化されたものではないため実証までには至らなかった。さらに、その際ドラマと比較した実際の会話は友人同士の気楽なおしゃべりであり和やかな雰囲気の話であったため、ドラマに多く見られた反論、非難、抗議、自己主張など対立的な場面を含むものではなかった。このような場面の違いが会話とドラマの女性文末詞

使用率の大きな隔たりの一因である可能性も否定できないと考えられる。

## 2.3 研究目的

主張度の強い場面（反論、非難、抗議、自己主張）における女性文末詞の使用状況を、音声を伴う会話データに基づいて明らかにした研究は現在のところ見当たらない。ドラマに見られるように、実際の会話においても主張度の強い場面では、現在の若い女性たちも女性文末詞を使用するのだろうか。主張度の強い場面に絞れば、現実の会話とドラマの隔たりは狭まるのだろうか。

本稿では、主張度の強い場面において、テレビドラマおよび実際の会話で女性文末詞がどの程度使用されているのかを数値化し、比較検討する。

## 3. 調査方法

### 3.1 二項対立表

本稿で調査対象とした女性文末詞は、水本他（2006）同様、現在若い女性も多用する「の（下降調）」「のね」を除いた①「かしら」②「Nね」③「Nよ」④「のよ」⑤「わ系」（「わ」「わね」「わよ」）の5種である。数値化に当たっては、水本他（2006）同様、表1に示す「2項対立表」を用いた。この表内に示した「女性文末詞使用形」と「不使用形」の文末形式の数の和を「有効発話総数」とし、「有効発話総数」中における「女性文末詞使用形」の割合を「女性文末詞使用率」とした。このような数値化により、女性文末詞が出現可能な環境においてどの程度使用されているかを明らかにすることができる。

表1) 二項対立表（女性文末詞、使用不使用の対立表）

女性文末詞使用形	不使用形（neutral）
かしら（ね）	かな・だろう（ね）・だろうか（ね）・つけ（ね）
N+ね ナA+ね 等	N+だね ナA+だね 等
N+よ（よね） 疑問詞+よ 等 ナA+よ（よね）	N+だよ（だよね） / 疑問詞+だよ 等 ナA+だよ（だよね）
{V / イA / ナA / N}+のよ	{V / イA / ナA / N}+んだよ
～わ /～わね /～わよ（わよね）	「わ」のない文末 /～ね /～よ（よね）

（N：名詞、イA：イ形容詞、ナA：ナ形容詞、V：動詞）

### 3.2 ドラマの調査方法

図1は、2005年放映のテレビドラマより、20代から30代の若い女性登場人物の女性文末詞使用率（●印）と同時期に収録した同世代の若い女性の同使用率（△印）を示したものである。現実社会の女性たちの使用率はほとんどが10%以下で0%も24名中6名おり、全体的に使用率

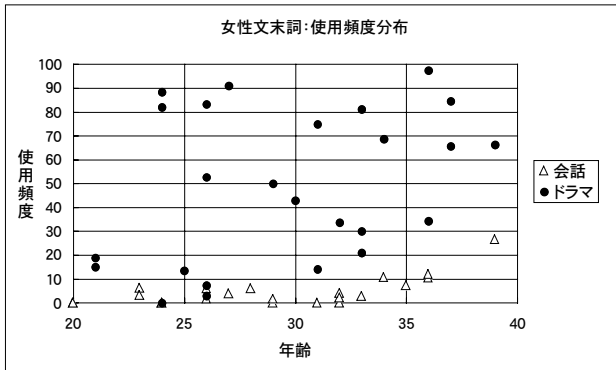


図1 ドラマ対実際の会話：女性文末詞率

し、40%未満の女性たちのうち使用率0%の1名を除く10名を今回の研究調査対象とする。それは、女性文末詞の使用率が低いという点で現実近く、また、普段は女性文末詞を使用しない登場人物が、主張度の強い場面でどの程度使用するのかを数値化することが、今回の研究目的の一つであることによる。調査にあたっては、対象登場人物ごとに、①相手の言動に対する反論、非難、抗議の文末、②相手の言動を改めさせるべく自分の意見を強く主張する文末を取り出し、それらの総文末数中に現れた女性文末詞の使用率を算出する。

### 3.3 実際の会話調査

反論、非難、抗議、自己主張といった主張度の強い場面における若い女性たちのカジュアル会話を一定量以上収録するのは実際には困難である。そこで、会話する二人が対立的構図になるようなロールプレイを実施することにした。ロールプレイは自然会話とは異なり、指定されたコンテキストの中で指定された役割を演じるものである。しかし、それでも演じる者の日頃の言語使用習慣が十分に現れるという点で、データ収集には適すると考えられる。コンテキストは、反論、非難、抗議、自己主張などの要素が自然に発話されやすいものを考え、次の3種とした。

- ① A (友人)：デート現場を目撃したと主張する。  
B (友人)：見間違いだと反論する。
- ② A (妹)：会社をやめてアフガニスタンの難民支援に行きたいと主張する。  
B (姉)：その考えを改めさせようと強く説得する。
- ③ A (同僚)：上司の引越の手伝いに一緒に行くと約束したが実際に来なかったBを非難・抗議する。  
B (同僚)：上司の引越の手伝いに行けなかった言い訳をする。

2006年6月、関東圏に10年以上居住している標準語を話す20代～30代の女性たち5組10名に前述のロールプレイを各ペア3種とも実施してもらった。今回調査対象とした女性たちの職業は、全員ロールプレイが自然に行える語学教師である。これは、水本他（2006）によるドラマの調査で、女性文末詞を高頻度で使用すると指摘された「キャリア系知的職業」（弁護士、社長秘書、大企業幹部、教師）の女性たちに属する。

こうして得られた主張度の強い会話を録音し、文字化したものを今回の会話データとし、ドラマの調査と同様、主張度の強い総文末数中に現れた女性文末詞の使用率を算出した。

## 4. 調査結果

### 4.1 ドラマの結果

ドラマの登場人物のうち、今回調査対象としたのは、女性文末詞使用率が40%未満であり、普段は女性文末詞を使用しないが主張度の強い場面になると女性文末詞使用にスイッチする傾

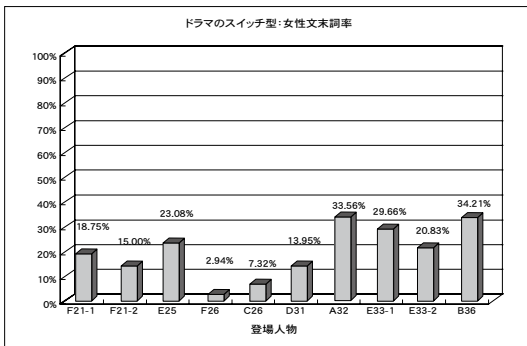


図2 ドラマのスイッチ型：女性文末詞率

向が認められる「スイッチ型」の女性たち10名である。図2、図3は、これら10名の女性文末詞使用率を個々の登場人物ごとに表したグラフである。グラフ中の横軸に記した「F21」等は、ドラマ「F」に登場した21歳の女性であることを示す。尚、同ドラマで同年齢の女性が複数登場する場合は「F21-1」「F21-2」とした。

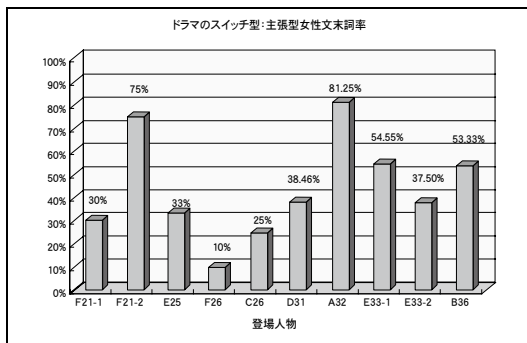


図3 ドラマのスイッチ型：主張度の高い女性文末詞率

図2は、調査場面を限定せずにドラマ全体を見た場合の、個々の登場人物の女性文末詞使用率を示す。この10名は、ドラマの登場人物の中でも女性文末詞を使用しない部類に入る女性たちで、「F26」「C26」で示した26歳の2名は、それぞれ2.94%、7.32%と最も低い。30代でも30%前後で、「A32」が33.56%、「E33-1」が29.66%、最も高い「B36」でも34.21%である。

一方、図3は、図2と同一人物につい

て、主張度の強い場面に限った場合の女性文末詞使用率を示したグラフであり、グラフ中の女性の提示順は図2と同様である。図2と図3を個々の女性について比較すると、10名すべての女性が、図2（ドラマ全体）より、図3で示す主張度の強い場面においてのほうがより高頻度で女性文末詞を使用することがわかる。F21-2にいたっては、5倍に増加している。また、ほぼ常時「～だよ」のような女性文末詞不使用形で話し、稀にしか女性文末詞を発しない女性たちの使用状況をみると、使用率が20%未満の女性5名のうち3名（F21-1、F21-2、F26）は、そのすべてが主張度の強い場面での使用であり、他の場面での使用は皆無であった。

次に、女性文末詞使用場面と使用例の特徴を見ていく。

①相手の言動に対する反論、非難、抗議の場面では、「Nよ」「のよ」「わよ」が多用される。

例1 男友達：ああ、(D31は動物と)なんか同じ匂いがするんじゃないですか。

D31：どういう意味よ。

例2 友達：あ、わりいわりい。

F21-1：もう、どこ行ってたのよ。

例3 後輩：Hさんが働きだしたってことは、先輩との結婚も近いかもしれませんね。

F26：なんで私がHと結婚しなきゃならないのよ。

例1～例3のように、反論・抗議の場面において、女性文末詞「Nよ」「のよ」が疑問詞を伴う形で多用される傾向が認められる。次は「わよ」の使用例である。

例4 後輩：怒ってるじゃないですか。この間からずっと。

E33-1：怒ってないわよ。

例5 後輩：夕べの相談事っていうのは美人秘書のことですか。

A32：何言ってんの、違うわよ。

②相手の言動を改めさせるべく、自分の考えや立場を強く主張する場面では、「わ」「わよ」「のよ」が多用される。

例6（借金を肩代わりしてやるという男に）

D36：ありがとう。でも、あなたが肩代わりする言われはないわ。

例7 A32：あなた、もっと怒った方がいいわよ。私にも、Sさんにも。このまま別れちゃっていいの？・・・あなたね、そんなに自分のこと卑下することないわよ。

例8 父：なあE33-1、今日ぐらい何とかならないか。

E33-1：主任だもん、責任者なのよ、パーティーの。

以上、グラフと使用例に見るように、ドラマでは、普段は女性文末詞を使用せずに話す女性たちも、反論、非難、抗議、自己主張といった主張度の強い場面では、女性文末詞使用に転じる傾向があることが数値の上からも明らかである。また、その際現れる女性文末詞は「Nよ」「のよ」「わよ」「わ」等である。

#### 4.2 ロールプレイの結果

次に、ロールプレイによって得られた現実の女性たち10名の調査結果を提示する。

図4は、ロールプレイ中のすべての発話をデータとしたもので、横軸に発話者の年齢を記した。今回データとした会話の場面には、ドラマと同様の対立関係における主張度の強い場面

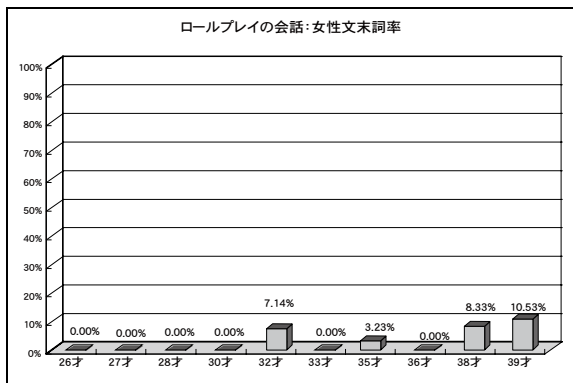


図4 ロールプレイの会話：女性文末詞率図

が多く含まれる。しかし、図4に見るように、女性文末詞はほとんど現れない。20代は3名とも0%、30代3名を含む10名中6名は全くのゼロであった。その他は32歳7.14%、35歳3.23%、38歳8.33%、39歳10.53%と、30代に微量な使用が見られるのみである。

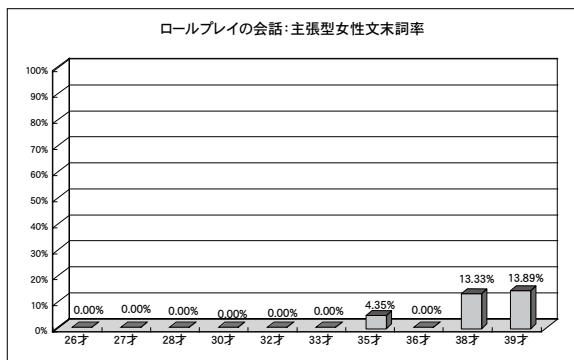


図5 ロールプレイの会話：主張度の高い女性文末詞率

図5は、4.1同様、図4と同一人物について、主張度の強い場面に限った場合の女性文末詞使用率である。図4でわずかながら使用が見られた30代の4名を見てみる。まず、図4で7.14%であった32歳が図3では0%となっている。これは、彼女が全体で2回使用した女性文末詞はいずれも主張度の強い場面での使用ではなかったことを意味する。その他の3名は3.23%が4.25%など、若干の増加は認められるが、5倍もの増加率を示したドラマとは大きな隔

たりがあり、ここから主張度と女性文末詞使用状況の相関を見ることはできない。

以上のように、女性文末詞使用率の絶対数そのものが極端に少ない今回のロールプレイによ

る調査結果は、現実社会における若い女性たちの間からは、主張度の強い場面等に関わりなく女性文末詞が消滅しつつあることを示すものである。

## 5. まとめと考察

ドラマの中で女性文末詞使用率が少ない若い女性登場人物および実社会の同世代の若い女性たち双方による主張度の高い場面における女性文末詞使用に関し、上述の調査を実施したが、その結果から次のようにまとめることができる。

- (1) ドラマでは、主張度の強い場面では女性文末詞を高頻度で使用する傾向が認められる。
- (2) 現実の女性たちのロールプレイによる会話においては(1)の傾向は認められなかった。
- (3) すなわち、普段女性文末詞を使用しない若い世代の女性たちは、主張度の強い場面でも女性文末詞を使わずに話す。
- (4) ゆえに、女性文末詞は主張度に関係なく消滅している。

これにより、水本他(2006)において、ドラマの中の若い女性と実社会の若い女性による会話の女性文末詞使用率には大きな隔たりが認められたが、それは双方の場面の違いによるものではないということが実証されたと言えよう。

では、現実を反映しているわけではないにも拘わらず、なぜドラマの世界にはスイッチ型女性が存在するのだろうか。考えられる理由としては、次の3点が挙げられる。

まず、調査結果でも明白のように、女性文末詞の衰退傾向が最近殊に進んでいるが、女性文末詞は、まず主張度の弱いところから衰退が始まり、主張度の強い場面においては、比較的長く使用され続けていた可能性も考えられる。この場合、主張度の強い場面若若い人も女性文末詞を使用していた時期が過去において存在していたことになり、そのような意味で、脚本家が作る女性像はある程度過去の実態を反映した女性をモデルとしているとも推察される。

次に考えられるのは、脚本家が現実の言葉の変化に気づいておらず、女性であるからには柔らかい表現で話すのが当然とのジェンダー・フィルター的認識をもっているという仮説である。女性文末詞などの女性ことばは、元来、主張の度合いを和らげる目的で使用されてきた。従来認識にたつて女性ことばを使わせれば、強い自己主張の場面でも相手との関係を柔らげる事ができ、幾分なりとも「女性らしさ」が保たれることになる。

最後の可能性として、脚本家は、現実には言葉の変化には気づいており、ある程度は脚本に反映している(普段は使わせない)が、登場人物の特徴をデフォルメする道具として意図的に女性文末詞を利用していることも考えられる。例えば、水本他(2006)の分類によれば、専業主婦、お嬢様キャラクター、キャリア志向の知的女性などがその代表的例であるが、ドラマ



ではそれ以外の登場人物でも、反論、非難など、相手との関係が対立的になったときには、女性言葉を使わせる。それは、女性文末詞によって女性であることを強調し、相手との関係をある意味和らげる一方で、女性とは自己主張する際に感情的に強く訴えるものであるとの認識にたっているのではなかろうか。これを女性の特徴的な属性として捉え、「女性らしさ」をデフォルメしているのだとすれば、そこには、先の仮説同様、脚本家によるジェンダー・フィルターの影響が認められる。

## 6. 今後の課題

この調査研究より考え得る脚本家の意識に関する上述の仮説に関しては、実際に脚本家への意識調査が不可欠である。彼らが現状を認識しないまま従来の女性のことば遣いに従っているのか、あるいは、充分認識しながらも役柄の特徴をデフォルメするという目的のために敢えて女性文末詞を使用させるのか、脚本家への意識調査によって明らかにすることが出来るであろう。また、主張度の強い場面で女性文末詞が多用されていた時期が実際にあったかどうかを検証する必要があるだろう。さらに、若い登場人物が現実には使用しない女性文末詞を使用するドラマを現実社会の同世代の若者たちが、どのように受け取っているのかという調査も必要である。それにより、ドラマを鑑賞する現実の若者たちがドラマの登場人物のことば遣いに不自然さを感じているとすれば、脚本家たちの意識にはジェンダー・フィルターが存在すると言えよう。今後は、これらの調査研究をさらに推し進め、女性文末詞によるジェンダー・フィルターを明らかにしてゆきたい。

**調査対象テレビドラマ** \*印は今回分析対象とした低頻度使用率の女性が登場するドラマ

1. あいくるしい (TBS: 2005年4月—6月放映)
2. アネゴ (日本テレビ: 2005年4月—6月放映) \*
3. エンジン (フジテレビ: 2005年4月—6月放映)
4. 汚れた舌 (TBS: 2005年4月—6月放映) \*
5. 恋に落ちたら (フジテレビ: 2005年4月—6月放映) \*
6. 女王の教室 (日本テレビ: 2005年7月—9月放映)
7. スローダンス (フジテレビ: 2005年7月—9月放映) \*
8. 曲がり角の彼女 (フジテレビ: 2005年4月—6月放映) \*
9. 夢で逢いましょう (TBS: 2005年4月—6月放映) \*
10. 離婚弁護士 (フジテレビ: 2005年4月—6月放映)

## 参考文献

1. 小川早百合 (1997) 「現代の若者会話における文末表現の男女差」『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念—』凡人社, pp.205-220.
2. 小川小百合 (2004) 「話し言葉の男女差—定義・意識・実際—」『日本語とジェンダー』vol.4
3. 尾崎喜光 (1999) 「女性専用の文末形式のいま」『女性の言葉・職場編』現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp.33-58.
4. 中島悦子 (1999) 「疑問表現の様相」『女性の言葉・職場編』現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp.59-82.
5. 野田晴美 (2002) 「第8章終助詞の機能」『モダリティ』新日本語文法選書4, くろしお出版, pp.271-273.
6. 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダー・フィルター—文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』Vol.V,日本語ジェンダー学会, pp.23-46.
7. 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」『日本語とジェンダー』, 日本語ジェンダー学会編, ひつじ書房, pp.73-94.
8. 水本光美, 福盛寿賀子, 福田あゆみ, 高田恭子 (2006) 「ドラマに見る女ことば『女性文末詞』—実際の会話と比較して—」『北九州市立大学国際論集第4号』pp.51-70.
9. 山路奈保子 (2006) 「小説における女性形終助詞『わ』の使用」『日本語とジェンダー』(<http://www.soc.nii.ac.jp/gender/journal/no6/03yamaji.html>)